

ティーチング・ステートメント

所属 横浜商科大学

名前 友岡賛

作成日 2025年2月27日

【責任】

総合教養センターに所属し、センター長を務め、また、国際交流センター長として国際交流プログラムの類いを運営。

直接的な教育活動としては「会計史」「会計基礎理論」「財務諸表論」「会計情報論」等の講義および論文指導を担当。

【理念】

エレガントな若者を育てたい。

「エレガント」「エレガンス」は抽象的に過ぎようが、具体的には夏目漱石描くところの高等遊民がボクの理想である。

むろん、エレガンスのごときは出自、育ちに負うところが少なくなく、大学教育のなしうることはたかが知れているが、しかし、そうした大学教育においてなしうることはリベラル・アーツの教育を措いてほかにはない考える。

とりわけ商学系の学部において扱われる経営学、商業学、会計学等は概して頗る実践的な学問と看做されているが、そうした学部においてこそ、リベラル・アーツの教育に大きな意義が認められると考える。

概して頗る実践的な学問と看做されている会計学を手掛けるボクは如上のことをまずは歴史を教授することをもって行う。

【方針】

授業において目指しているのはまずは、学問するという営みに触れて欲しい、より具体的には、学者という人種に触れて欲しい、すなわち、学者としてのボクに触れて欲しい、ということである。

大学教員は学者なんだ、ということを知って欲しい。授業を通じて、学問という営為を体感して欲しい。

学者という人種がいかに役に立たないことに拘泥しているのかを知り、役に立たないことを学ぶことの贅沢さを知って欲しい。役に立たないことを学ぶことがいかに贅沢なことかを知って欲しい。役に立たないことを学ぶことを楽しんで欲しい。

「役に立たない会計学」をもって標榜。

【方法】

◆専ら学者としての自己の関心にもとづく授業を行う。

◆知識は問わず、専門性を身に付けることは求めない。

「雰囲気だけ分かればいい。細かいことは分からなくていい」「憶えなくていい。明日になったら忘れてていい」を連呼。

◆知識を問う出題はしない。

◆テキストの類いは用いない。

教壇に立つボクの思考プロセスを板書をもって表しつつ講ずることにより、なにをどう考えているのかを体感してもらう。

◆「会計史」に限ることなく、いずれの講義においても歴史的な観点をを用いる。

そうすることにより、対象が相対化される。

◆概して歴史書の類いには「歴史を学ぶことの意義」についての記述が付きものながら、歴史を教授する際にそうした意義などといったことは決して述べない。

意義は役立ちであって、そうしたことは求めない。

「へえ、そんなことがあったんだ」といった、知ることの悦び、のみをもたらしたい。

◆学者としてのボクの悦び、学問することのボクの悦びを伝えるための授業を行う。

【成果】

大学院進学者の続出。

アグレッシブな教え子、尖がった教え子、ガツガツした教え子の逡巡。

【目標】

常に学者であり続ける。